議会レポート

発行者　鈴鹿市議会議員 石田秀三
鈴鹿市伊船町2751　電話 371-0423
FAX 371-2469

2009.4.30. №１６４

ズサンで無責任な処理

生活保護不正支給事件で、外部委員会が指摘

３月25日、鈴鹿市の生活保護不正支給事件について、外部委員による「鈴鹿市生活保護調査委員会」が3ヶ月にわたって問題点を調べた「報告書」が出されました。これを受けて議会では4月15日、全員協議会の場で報告書の内容についての論議が行なわれました。

「越山グループ」40人だけで保護費総額３億円、うち通院移送費は１億円にのぼる

昨年１月に明るみに出た「介護タクシー」の不正請求に端を発し、その後逮捕され有罪となった越山・下辺の２人が、鈴鹿市の生活保護を食い物にして、莫大な金額の保護費を不法に受け取っていたことが、次々に明らかになってきました。大半が同じアパートに囲い込まれた「越山グループ」と呼ばれる40人33世帯が、2003年から2007年の間に受け取っていた保護費の総額は約３億円、うち通院移送費（タクシー代）だけで約１億円という、驚くべき金額になります。

報告書では、越山らの詐欺の手口とともに、鈴鹿市生活支援課がこの詐欺行為を見逃した、あるいは黙認したことについて、「ズサンで無責任」な事務処理の仕方が日常化していて、そこを越山らにつけ込まれたとしています。

つけ込まれた側の鈴鹿市の問題点として、「法令・通知に示された手続きを踏むことなく、通院移送費を支給していた」「必要な決裁を仰ぐことなく、担当者の判断で支給していた」「生活保護費を本人以外の者に支払うなど、現金の取り扱いに問題があった」などと列挙、呆れるほどのズサンさをきびしく指摘しています。要するに、越山グループについては、何もチェックなしに言われるがままに金を支払い続けていた、そして誰もそのことを「おかしい」と言わなかった、というのです。

なぜ？誰も止められなかったのか

越山は「グループ」のメンバーを、毎日のように複数の医療機関に必要もないのに通院させ、下辺のタクシーを使って巨額の通院移送費の支給を受け、その金を自分に還流させていた。また、受給者の生活保護費そのものもピンはねしていた、借金させた金を奪い取っていた、などの事実が調査委員会の報告書には多数記載されています。越山という人物はいわば「生活保護ブローカー」で、生活困窮者を手足のように使って、私腹を肥やしていたのです。そして市役所が、その片棒を担いでいたのです。

最後のセーフティネットを食い物にした罪深さ

越山が好き勝手をしていたその時期に、同じ地区で私がお世話していた世帯が、少し保護基準をオーバーしたので「保護廃止」になったことを憶えています。その時は「公正な基準とルール」に則って決まったのだからやむを得ないと思っていましたが、同じ担当者が一方では湯水のような浪費を黙認していたとは、いまだに信じられません。

生活保護は、生活に困窮した国民が最後に頼ることのできる安全網＝セーフティネットです。それを食い物にして私腹を肥やしたこと、その片棒を行政が担いだことは、絶対に許されません。爪に火をともすような、つましい毎日の生活を送っている多くの市民への背信行為です。

役所の「組織風土」どうしたら変えられるか？

報告書では、「ズサンで無責任な事務処理が『仕事の仕方』として生活支援課に定着し『組織の風土』と化していた」と、事件の背景をとらえています。一部の不心得な職員が起こした事件ではなく、人事異動でだれがその部署に行っても変えられなかった、止められなかった。そこに深い闇のような「組織風土」が存在していると言うのですから、解決も簡単ではありません。表面的な「反省」だけでは、また同じような事件が起きるかもしれません。徹底的に問題点を掘り下げることが求められます。

いまだに事件の全貌は明らかになっていません。また、事件の責任の所在、損害金額の返還をどうするのか、などの大問題が目の前にあります。これらにきっぱりとけじめをつけることが、「風土」改革のまず第一歩です。

「志位さんの話、よく分かったわ」

鈴鹿市民会館で演説する志位委員長

鈴鹿市で初めて志位委員長を迎えて開かれた４月５日の日本共産党演説会は、市民会館が超満員となる盛況でした。私と森川議員で司会を担当したのですが、開会の３時前から続々と人が入ってきて、志位委員長が登場した時には、大波のような拍手と声援が起こりました。参加した皆さんも、「よく分かる話でした。」「初めて共産党の話を聞いたが、今の政治の問題点、どうしたら良くなるのかが分かり、スッキリとした。」と語っていました。

◎当日の志位委員長のお話がＤＶＤで見られます。無料でお分けしますので、ご希望の方は市議団まで連絡ください。

生活相談はお気軽に、お早めに

昨年の暮れから、議員団への生活相談がこれまでにないほど多くなってきました。「派遣切り」や「雇い止め」によって、仕事も住む所もなくなる、当面のお金がない、といった切羽詰った人が、特に若い人が増えてきているのが特徴です。

「ネットで見たから」とか「困ったときは共産党と聞いたから」とか、党の事務所に直接ＳＯＳの電話が入ったり、待ったのきかない相談が多くて緊張する日々が続きました。あちこち駆け回って、とにかく当面の生活のメドが立てばホッとします。しかし、そういつもうまく解決できるものではありません。相談者とともに、出来ること出来ないことを話し合います。

議員で出来ることは、市役所関係のことが中心で、労働問題はやはり組合の方へ、法律問題は弁護士や司法書士などの専門家にお願いします。しかし、その前段の問題の整理と、解決の道筋や方向性については、親身に相談にのります。大体の人は「何が問題なのか、どこに行ったらいいか」分からないから困っているのです。行き詰まってからではなく、早く相談に来てもらうと、こちらも助かります。

皆さんの周りに困った人がいたら、どうぞ一声かけて下さい。

ずいそう

「レッドクリフ」の中国

最近はあまり映画を観るひまがなくて、新聞の映画欄で見て面白そうだなと思っているうちに、もう終わってしまっていることがほとんどだ。

そんな中でもやっと観た映画は、「おくりびと」と「レッドクリフ」である。「おくりびと」は、原作の「納棺夫日記」（青木新門著）と合わせて味わうと、ひじょうに深く「人間」について考えさせられる作品である。

このごろは身の回りや友人の葬儀が多いが、葬儀に参列するたびに思うのは、その人の「死に方」というのが、その人の「生き方」の最終形態、集大成でもあるということだ。「納棺夫」はその最後のお手伝いをする大事な仕事だということが、この映画によって広く世間に知らされた。

西暦208年「赤壁の戦い」のスケールの大きさ

「レッドクリフ」は第１部が去年の秋、そして第２部がこの４月という大巨編映画である。「三国志」や中国の歴史についてはよく知らない私だが、何度か中国に旅行に出かけるたびに、その広大さと奥の深さは実感している。そして、この大きな国を一つにまとめるほどの権力の強大さを想像するのであるが、現代のように通信・交通が発達していても難しいことを、古代の権力者はどのように行なったのだろうか、とも思う。

「赤壁の戦い」は、今から1800年も前、曹操の軍80万人、対する孫権・劉備連合軍５万人、圧倒的な力の差を知恵と勇気で逆転する痛快な物語である。日本の「関が原の戦い」が東西両軍とも８万人、しかも時代が1600年だったことを考えると、古代中国のスケールの大きさに圧倒される。

じっさいに、中国で秦始皇帝稜や兵馬俑、万里の長城などを見ると、いったいどれだけの人が、どれだけの時間をかけてこんなものを作ったのかと感心する。もし戦争などせずに、この文明の力を人々の生活のために活かしたなら、どんなにいい世の中になっていただろう。いまだに人類は、2000年経っても同じような愚行を繰り返しているに過ぎないのだろうか。

中国は「文化大革命」の内乱から今日まで30年ほど、戦争のない時代を過ごしている。平和だからこそ、盛大にオリンピックを開いたり、こんなスケールの大きい映画を作ることが出来たのだろう。